

# 「江戸時代とは」

2018年 5月 20日

旧忍藩第十六代 当主

公益財団法人 忍郷友会

会長 松 平 忠 昌

## 江戸時代とは

### 1. 江戸時代

- (1) 江戸開府
- (2) 海禁令（鎖国令）
- (3) 人口の推移

世界史略年表（1600年代、1700年代、1800年代）

徳川歴代将軍一覧（初代 家康公 から 15代 慶喜公）

### (4) 社会制度と幕藩体制

- ① 将軍を頂点とするピラミッド構造
- ② 武士社会
- ③ 農民社会
- ④ 都市民社会
- ⑤ 士農工商
- ⑥ 登録制度
- ⑦ 幕藩体制について
- ⑧ 参勤交代

### (5) 諸制度

- ① 武家諸法度
- ② 禁中諸法度
- ③ 諸宗寺院法度
- ④ 五人組制度

### 2. 江戸時代の生活について

- (1) 互助・共生の知恵と人間関係
- (2) 江戸しぐさ
- (3) 外国人の観た日本

### 3. その他

- (1) 暗い江戸時代？
- (2) 生活の中の違い

### 4. 今 求められるものは

### 5. 皆様へ

## 1. 江戸時代

### (1) 江戸開府

- ① 幕府が江戸に開かれた 旧暦 慶長 8年 2月12日  
(西暦1603年 3月24日) から  
明治 2年 2月24日 (1869年 4月 5日)までの  
「266年間」
- ② 実際には、1600年 関ヶ原の戦い から 1867年  
大政奉還に至るまでの幕藩体制国家の時代である。

### (2) 海禁令 (鎖国令)

この時代の特徴は、旧暦 寛永18年(1642年)から  
嘉永 7年(1854年)までの「212年間」布かれた  
「海禁(鎖国)令」であり、この長期安定した国家体制の  
下に政治、経済、文化思想などが世界に比類のない  
独自の発展を遂げている事にある。

### (3) 人口の推移

(単位: 千人)

1603年	12, 237	(推計 18, 500)
1650年	17, 498	(推計)
1700年	28, 287	(推計)
1721年	26, 056	(吹塵録 第一回調査)
1750年	25, 918	(官中秘策 第六回調査)
1804年	25, 622	(吹塵録 第十五回調査)
1846年	26, 908	(吹塵録 第二十二回調査)
1872年	33, 111	(壬申戸籍)

# 世界史略年表

年 代	日 本	アメリカ大陸	ヨーロッパ	アジア
1600	1600 関ヶ原の戦い(徳川家康が勝利)	1607 イギリスがアメリカにヴァージニア州を建設	1603 イギリス スチュアート朝が始まる	1600 イギリスの東インド会社設立 1602 オランダの東インド会社設立
1603	1603 江戸幕府を開く		1613 ロシアでロマノフ王朝が始まる	
1615	1615 大坂夏の陣	1620 清教徒がメイフラワー号でアメリカのプリマスに上陸	1618 ドイツで30年戦争が始まる	1623 インドネシアでアンボイナ事件がおこる
1641	1641 海禁令(鎖国が完成)		1628 イギリス 権利の請願 1642 イギリス ビューリタン革命	1644 明が滅亡、清の中国支配が始まる
1657	1657 明暦の大火		1660 イギリスの王政復古	1658 ムガル帝国でアウラングゼーブ帝が即位
		1664 イギリスがオランダからニューアムステルダムを取得 ニューヨークと改名	1661 フランス ルイ14世 親政が始まる	1661 清の康熙帝が即位
1680	1680 徳川綱吉第五代將軍		1662 ロシア ビョートル1世即位	1673 中国 三藩の乱
1690	1690 湯島聖堂が完成			1689 清がロシアとネルチンスク条約を締結
1700	1702 赤穂浪士の討入り	1702 アメリカでアン女王戦争	1700 ロシアとスウェーデン間でホップ戦争が始まる 1701 プロセイン王国が成立	(ムガル帝国の衰退)
1716	1716 徳川吉宗が享保の改革を始める		1714 イギリス ハノーバー朝が始まる	1722 清の雍正帝が即位
1720	1720 洋書の禁を緩和		1721 イギリス ウォルポール内閣成立(責任内閣制)	1735 清の乾隆帝が即位
1733	1733 米価高騰による江戸での打ち壊しがおこる	1732 アメリカに13番目の植民地(ジョージア州)建設	1740 プロセインのフリードリッヒ2世が即位 オーストリア継承戦争が始まる	1736 イランのサファビー朝が滅亡
1772	1772 田沼意次が老中に就く	1775 アメリカでフレンチ・インディアン戦争始まる		1757 インドでブラッシーの戦い
1774	1774 杉田玄白「解体新書」刊行	1775 アメリカ独立戦争が始まる	1756 7年戦争始まる	おこる
1787	1787 寛政の改革	1776 アメリカ 独立宣言 1789 ワシントンがアメリカの初代大統領に就任	1772 第一次ポーランド分割 1795 第二次ポーランド分割	1793 イギリス使節マカートニーが中国訪問
1792	1792 ロシア使節ラクスマンが根室に来航		1799 フランス クーデター発生	1798 ナポレオン エジプト遠征





# 世界史略年表

年代	日本	アメリカ大陸	ヨーロッパ	アジア
1800	1804 ロシア使節ロザノフが 長崎に来航	1803 フランスからルイジアナを 買収	1804 ナポレオンがフランス皇帝 に即位	
	1808 イギリス フェートン号が 長崎に来航 間宮林蔵が樺太を探検	1807 フルトンが蒸気船を製造 (クラームント号)	1805 トラファルガー海戦 アウステルリッツの戦い	
		1810 ラテン・アメリカ諸国の 独立運動が活発化	1806 神聖ローマが滅亡 ナポレオンが大陸封鎖令 を発令	1813 清朝(中国)がアヘンの 販売禁止
		1816 アルゼンチン独立	1812 ナポレオンのロシア侵攻 1813 ナポレオン ライプティヒで 敗戦	1815 清(中国)がアヘンを禁輸
		1820 ミズリー協定ができる		
	1817 イギリス船が浦賀に来航		1814 ナポレオンが退位 エルバ島へ流刑	
	1823 シーボルトが長崎に来る		ウィーン会議開始 1815 ナポレオンの100日天下	
	1824 異国船打ち払い令が出る	1823 モンロー宣言が出される		
	1832 天保の大飢饉		1821 ギリシャ独立戦争が 始まる	
		1836 テキサス独立戦争が 始まる	1825 ロシア でカプリストの乱	
	1837 大塩平八郎の乱			
	1839 蛮社の獄		1830 フランス 7月革命	
	1841 天保の改革	1845 アメリカがテキサスを併合	1830 イギリス 鉄道敷設 (マン チェスター・リバプール間)	1840 アヘン戦争が始まる
		1846 アメリカ・メキシコ戦争が 始まる	1837 イギリス チャーチスト 運動が始まる	1842 清国がイギリスと南京条約 締結
		1848 アメリカ カリフォルニアで 金鉱が発見される	1848 マルクス・エンゲルスが 共産党宣言を発表	1851 中国 太平天国の乱
	1853 ペリーが浦賀に来航		フランス 2月革命、ドイツ・ オーストリアで3月革命	
	1854 日米和親条約締結			
	1858 日米修好通商条約締結 安政の大獄始まる		1853 ロシアとトルコ間で クリミア戦争が始まる	1856 アロー戦争始まる 1857 インドでセポイの反乱おこる
	1860 桜田門外の変	1861 アメリカ 南北戦争 フランスがメキシコに出兵	1859 ダーウィンが「種の起源」 を刊行	
	1863 薩英戦争	1863 アメリカで奴隷解放宣言 出される	1861 イタリア王国が成立	1862 中国 洋務運動始まる
	1867 大政奉還 江戸幕府が倒れる		1866 プロセイン・オーストリア 戦争始まる	1867 マライ植民地がイギリスの 直轄領となる

## 徳川歴代将軍一覽

氏名	肖像	院号	官位	在職期間	出身家	享年	墓所
徳川家康		安国院 東照 大権現	従一位 太政大臣	慶長8年2月12日— 慶長10年 4月16日 (1603-1605)	安祥松平家	75	日光 東照宮
徳川秀忠		台徳院	従一位 太政大臣	慶長10年4月16日— 元和9年7月27日 605-1623)	(1 徳川氏	54	増上寺
徳川家光		大猷院	従一位 左大臣	元和9年7月27日— 慶安4年4月20日 623-1651)	(1 徳川将軍家	48	輪王寺
徳川家綱		嚴有院	正二位 右大臣	慶安4年8月18日— 延宝8年5月8日 651-1680)	(1 徳川将軍家	40	寛永寺
徳川綱吉		常憲院	正二位 右大臣	延宝8年8月23日— 宝永6年1月10日 (1651-1680)	館林徳川家	64	寛永寺

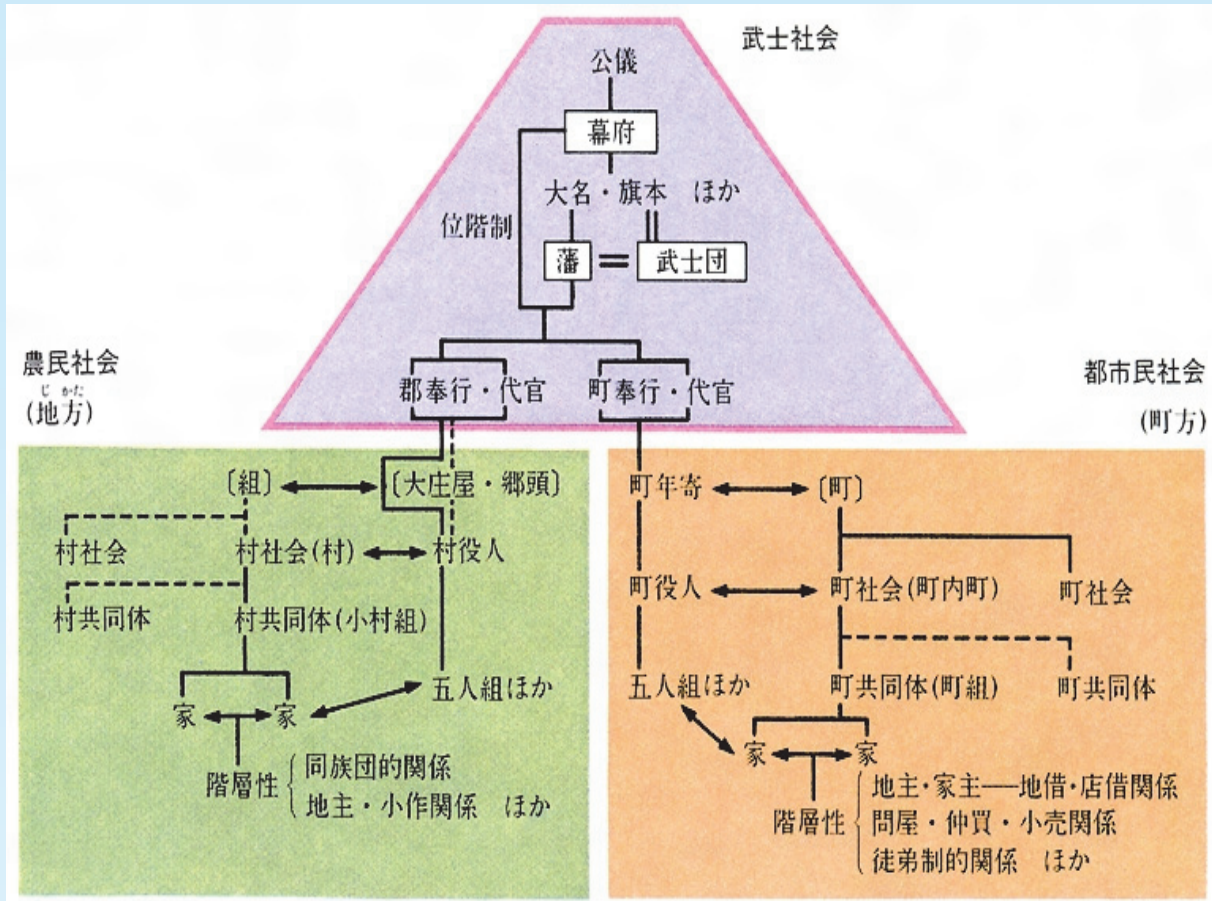
氏名	肖像	院号	官位	在職期間	出身家	享年	墓所
徳川家宣		文昭院	正二位内大臣	宝永6年5月1日— 正徳2年10月14日 (1709-1712)	甲府徳川家	51	増上寺
徳川家継		有章院	正二位内大臣	正徳3年4月2日— 享保元年4月30日 (1713-1716)	徳川将軍家	8	増上寺
徳川吉宗		有徳院	正二位右大臣	享保元年8月13日— 延享2年9月25日 (1716-1745)	紀州徳川家	68	寛永寺
徳川家重		惇信院	正二位内大臣	延享2年11月2日— 宝暦10年5月13日 (1745-1760)	紀州徳川家	51	増上寺
徳川家治		浚明院	正二位右大臣	宝暦10年5月13日— 天明6年9月8日 (1761-1786)	徳川将軍家	50	寛永寺

氏名	肖像	院号	官位	在職期間	出身家	享年	墓所
徳川家斉		文恭院	従一位 太政大臣	天明7年4月15日— 天保8年4月2日 (1787-1837)	一橋徳川家	69	寛永寺
徳川家慶		慎徳院	従一位 左大臣	天保8年4月2日— 嘉永6年6月22日 (1837-1853)	徳川将軍家	61	増上寺
徳川家定		温恭院	正二位 内大臣	嘉永6年11月23日— 安政5年7月6日 (1853-1858)	徳川将軍家	35	寛永寺
徳川家茂		明徳院	従一位 右大臣	安政5年10月25日— 慶応2年7月20日 (1858-1866)	紀州徳川家	21	増上寺
徳川慶喜			従一位 内大臣	慶応2年12月5日— 慶応3年12月9日 (1867-1868)	一橋徳川家	77	谷中 靈園



## (4) 社会制度と幕藩体制について

### ① 将軍を頂点とするピラミッド構造



- ② **武士社会 = 幕藩体制**  
 公儀—幕府 — 諸藩 = 大名、旗本、御家人の武士  
 (位階制度)
- ③ **農民社会**  
 郡奉行—代官 — 庄屋、郷頭 (村役人—五人組)と  
 組 (村社会—村共同体—農家、  
 地主・小作人、職人)
- ④ **都市民社会**  
 町奉行—代官 — 町年寄 (町役人—五人組)と  
 組 (町社会—町共同体—町家、商家の家主・家作  
 間借人、職人)

## ⑤ 士農工商

- ・身分制度で世襲制  
但し、この分類は中国春秋戦国時代の表現であり、必ずしも日本の制度として確立していたものではないようです
- ・そもそもは、兵農分離の転換期は、戦国時代に豊臣秀吉による「刀狩り」により流動的であった「武士」と「農民(百姓)」が職業として固定され、江戸時代になって強化・発展して世襲制になったとみられています
- ・この強化策の中に法律・法令が定められ「武家諸法度」、「禁中並公家諸法度」、「諸宗寺院法度」があり、庶民には「五人組制度」が適用されていました
- ・身分としては、「武士」を上位に置き、庶民(農民。町人)は同格に扱われていました
- ・唯一「非人」という一線を画された人々が、人間的な身分格差(上下関係)を受けていたようです

## ⑥ 登録制度

- ・人別帳 (現在の「戸籍」に当る法制度)  
職業、所在を記録して、庶民を制度的に縛る目的で管理されていました
- ・過去帳 (死亡通知) 各寺社がこれを管理していました
- ・手形 (通行許可証)  
幕府、奉行所で発行され、一定の地域から移動する折に関所を通行するために持参することが義務付けられていた

## ⑦ 幕藩体制について

- ・「幕府」とその支配下にあった 領地を有する「諸藩」を統治する「封建的支配体制」であり、「将軍」を頂点とする「武家社会の中央集権体制」のことです
- ・領国における「兵農分離」の下で、幕府・諸藩が農民から現物年貢(米、その他の農作物)を収奪する社会関係
- ・関ヶ原の勝利後 1603年 江戸に「幕府」を開き、織田・豊臣政権とは違う 新たな政治・経済・軍事基盤を整備した統治機構を「徳川家康」が確立
- ・代々の将軍は、常設の最高執行機関の「老中」、「旗本・御家人」、「三奉行」(寺社、勘定、町奉行)に「若年寄」を加えた各職制の合議制による「令」等により治世を行ったようです
- ・監査機関としては、大名を観察する「大目付」、旗本・御家人を観察する「目付」が置かれ、庶民は「五人組」という制度で縛られていた訳です
- ・各藩の封地は、お菓子の「バームクーヘン」状に配置され、江戸城を直線的に攻めることができないように工夫されており、並び方は、江戸城を中心に「旗本」、「親藩」、「譜代」、「外様」というように連携が取り難い仕組みで、相互に監視させるように仕向けていたようです

## ⑧ 参勤交代

- ・各大名は、特例で許された「大名家」を除き、全てが「参勤交代制度」に縛られ、各大名家の格式により行列の規模(人数や持参する道具類)が定められていました
- ・この制度化は、徳川三代将軍 家光が命じたもので、その影響としては、各地に経費が落ちる仕組みであっただけでなく、各藩が持参した特産品の交易・交換やお祭りのような文化交流も盛んになったと云われています

・武家諸法度の寛永令に以下の条文が記されています：  
「大名、小名在江戸交替相定ル所ナリ  
毎歳夏四月中、参勤致スベシ  
従者ノ員数近来甚ダ多シ、且ハ国郡ノ費、且ハ人民ノ劳ナリ  
向後ソノ相応ヲ以テ コレヲ減少スベシ  
但シ上洛ノ節ハ、教令ニ任セ、公役ハ分限ニ随フベキ事」

・口語にすると以下のようになります：  
「大名、小名の領地と江戸の交代勤務を定める  
毎年四月中に参勤すること  
供の人数が最近非常に多く、領地・領民の負担になっているので、今後は相応しい人数に減らすこと  
但し、甲とに行く場合は、定めのとおりとし、役目に相応しいものにする事」

・参勤交代の費用と日数（推定）：

藩名	石高	距離	日数	人数
伊達家仙台藩	63万石	92里	9日	3千人
前田家加賀藩	103万石	119里	14日	4千人
島津家薩摩藩	77万石	440里	60日	2千人

## (5) 諸制度

統制策として、各社会・階層に対して設けられていた制度

### ① 武家諸法度（1614年 発布）

大名、旗本・御家人などの武家社会に対する制度：

「朱印状」による「領地安堵」、

大名家の家督相続における将軍への「嫡子お目見え」、

「参勤交代」、「格式」と「位階制度」、などが規定され、

「老中」、「若年寄」、「奉行」が管轄し、

「辞令」が発令される仕組みでした

### ② 禁中並公家諸法度（1614年 発布）

朝廷及び公家社会に対する制度：

各行事の届出などが厳しく規定されていて「京都所司代」

が管轄していました

### ③ 諸宗寺院法度（1614年 発布）

寺社、寺院を含む宗教社会に対する制度：

寺社奉行が管轄（以前は、朝廷と公家が管轄して

いたものを幕府管轄に移行）

### ④ 5人組制度（1649年 慶安御触書で集大成された）

農民及び都市民社会に対する制度： 奉行、役人が管轄

年貢租税は「村単位」の連帯責任方式、付課税、賦役の割り当てなども厳しく規定されており、助郷役・国役などは負担が大きかったと見られています

一方では、連帯責任であるが故に「互助」が暗黙の約束となっていたようで、「向こう三軒両隣」という表現は聞き慣れている方も居られることと思います



## 2. 江戸時代の生活について

### (1) 互助・共生の知恵と信頼関係:

- ① 「五人組制度」の善く見える部分であり、責任の反面互いに工夫をして助け合う人間関係が成立していたようです（お米の貸し借り、積立金の補助など）
- ② 足るを知るという考え方：  
過不足のない生活、互助の生活は、極端に貧しい訳ではなかったようで（貧乏人は居るが貧困ではない）、自給自足の経済（鎖国のため）では、分相応の生活で贅沢はしていなかったとみられています

### (2) 江戸しぐさ:

- ① 今も残っている「思い遣りの表現」=仕草
- ② 一例として、人の前を通る時にする「手の仕草」や「会釈」が挙げられます

### (3) 外国人の観た日本人の生活:

- ① 明るい顔、礼儀正しい態度から受けた躰やマナーの善さに感心させられたという記述が、18世紀のスウェーデン人（チュンベリー）、19世紀のオランダ人（シーボルト）などの報告書や日記に多くみられます
- ② 驚異的な識字  
渡し船の船頭や町人が瓦版や本・高札などを読めることに驚いたとの報告もあるほどです

### 3. その他

#### (1) 暗い江戸時代 ? (教育が作った誤ったイメージ):

- ① 鎖国、圧政・弾圧、飢饉、一揆など悪い事例が教科書に多く載せられていますが、仮に、暗くつらい時代であれば、200年を超えて続くとは考え難いので、正しい歴史を伝えたいものです
- ② 江戸時代の人口は、徳川幕府が開かれてから260年の間に約3倍の「3千万人」を超えた訳であり、暮らし易さや治安の行き届いたある意味での豊かな生活が出来なくては、増えることは有り得なかったと云うべきです

「 **江戸時代は見直されるべき時代です** 」

#### (2) 生活の中の違い:

列挙してみると、以下の全てに違いが見られます:

##### ①「元号」

- ・江戸時代には、「江戸」という年号があった訳ではなく、将軍が変わるたびに年号が変わることもなかったのです
- ・古来使われていた「和暦」は天皇が定め、江戸時代には即位と同じ時期に変わるのではなく、天災、不吉な事態、などの理由で変わることが多かったようです
- ・使われた年号は「25号」で、「慶長、元和(げんな)、寛永、慶安、明暦、延宝、天和(てんな)、貞享(ていきょう)、元禄、宝永、正徳、享保、延享、宝暦、安永、天明、寛政、享和、文化、文政、天保、嘉永、万延、文久、慶應」です

## ②「衣」

- ・着物(和服)
- ・階級(武士とそれ以外)によって着るものが違っていました
- ・庶民にとって着物を新調することは大変難しいことであつたようで、古着屋が繁盛したと云われています

## ③「食」

- ・一般庶民は、お米が主食ではなかつたようです
- ・主食に「肉」がでることも殆どなかつたようで、主な蛋白源は「魚」であつたようです
- ・大衆食堂、飲み屋、なども繁盛していたようです

## ④「住」

- ・現在の「鉄筋コンクリート造り」は全くなく、木造の平屋や長屋構造が主でした
- ・武家の造りは、格式や石高によって決まっていた時代もありましたが、最も大変であつたのは「移封」の時で、場所によっては家財道具一式はもとより、「木材」(家を解体したもの)から「墓石」まで運んだとされています



## ⑤「医学」

- ・現代のような技術はなく、世襲制の医者が多かったとみられています
- ・蘭学の導入があった程度で、手術などの設備・技術も全くといって良い程に整っていなかったため、肺炎(労咳)での死亡率も高かった訳です(7歳以下の死亡が多かったとも云われています)
- ・平均寿命は「25歳以下」であったといわれており、70歳で「古稀」と云われるのも当然であったようです
- ・現在は恵まれていると云えますので、高齢化社会となっていることも頷ける次第です

## ⑥「エネルギー源」

- ・電気は全く存在しておらず、電気なしには生活できない現代人には想像を絶するものがありそうです
- ・ガスもなく、照明の光源としては「油(菜種油)」や「蠟燭」
- ・水道や下水も完備していた訳ではなく、河川や雨水が水源であり、衛生面では不安材料が多い時代であったと思われる

## ⑦「通信」

- ・代表的な手段は「飛脚」による手紙・文書の遣り取りがあげられます（メールや携帯電話は存在せず、現代では考えられない程の不便さであったと云えます）
- ・江戸時代には、江戸幕府が開かれたことから京都との公文書の往復があり、その必要性から常設されるに至ったと云われています
- ・現在では想像できませんが、江戸からの飛脚が「2日間」で届けたそうです（今は、翌日には普通郵便が届く時代です）
- ・その費用は「銀700匁」（今の金額で「140万円位」）だったそうですが、500kmの行程を昼夜を問わずに人が走った訳で、平均10~12km走る人が50人位必要であったことと夜間は提灯持ちが付くことから、相当な人数を要したので人件費と関係者を含め妥当なものであったともみえます
- ・一般庶民の飛脚料金は、並便「30文」（約600円）と安く設定されていましたが、必ずしも期日（出発日を含め日限）の取決めがないことが不都合であったようです
- ・期日指定をすると期間によって費用が高くなった仕組みであり、「10日限」で「60文」（約1,200円）、「7日限」で「銀1匁」（約2,000円）、「5日限」で「金一朱」（約3万円）だったようです
- ・仕組みとしては、「問屋」から「問屋」（幕府公用便は奉行所間）をリレー中継していく「継ぎ飛脚」と呼ばれています（大名の自前の仕組みもあったようです）

## ⑧「交通」

- ・町中や宿場間の交通手段は、「駕籠」や「馬」を除けば全て「徒歩」で、今のように「自動車」、「自転車」、「バイク」など便利な乗りものは無かった時代です
  - ・場所によっては、「舟便」もあった訳ですが、「渡し船」、「仕立て船(屋形船)」、「猪牙」などがあり、多くは江戸や大阪の水路を走る舟であったので、江戸から大阪・名古屋へのものは大型の「廻船」で500~1,000石のものが使えるものでした
- 費用も通信と同様に、「時間」や「設定条件」で高低の差が大きかったようです

## ⑨「貨幣制度」

- ・金貨、銀貨、銅貨の3種類が使われていました
  - ・金貨は「小判」で主に江戸を中心に流通
- 「1両小判」の他に、その1/4の「一分金」とさらにその1/4の「一朱金」がありました（1両＝約7万円）
- ・「銀貨」は重さを基準に「1分銀」、「5匁銀」、が流通（銀1匁＝約2千円）
  - ・「銅貨」は全国的に流通した貨幣で、「1文銭」や「4文銭」があり、「寛永通宝」が代表的なものです
  - ・相場は「金座」と「銀座」の両奉行が管理しており、「両替商」(銀行)も奉行所の管理下にありました

## ⑩「言語」

- ・「日本語」であったことは言うまでもないことです
- ・徳川幕府が定めた「共通語」や「標準語」はありませんでした（従って、「方言」という考え方や理解もなかったと云えます）
- ・江戸時代の初期は、各地から何十万という人（武士やその家臣）が集められたので、言葉は混乱していたと云われています
- ・文献として残っているものは、全て「文語体」ですので、どの様な「話言葉」（会話）であったのかは良く判っていないようです（映画やテレビの時代劇は、かなり判り易く脚色されているとみるべきです）
- ・武士と町人では、言葉使いが違っていたことは明らかですが、中でも武士の表現は「形式を重んじており、堅苦しいもの」であったように思われます

## ⑪「教育」

- ・藩校
- ・寺子屋
- ・私塾

（ 詳しくは、次回の講座に譲らせて頂きます ）

## ⑫「外国との関係」(輸入品、在日外国人、等々)

- ・鎖国のため「外国製品」を手にすることができた人は限られていました

現在では、全く考えられない程「海外」は庶民の視野には入って来ない存在でしたので、江戸時代の後期になり外人や輸入品を目にした時の人々の驚きは大変なものであったようです

- ・海禁(鎖国)の政策下での貿易・交易は幕府の直轄又は認可制でした
  - 長崎の「唐人屋敷」における「清」(中国)
  - 長崎の「出島」における「オランダ」
  - 対馬藩を仲介した「李氏朝鮮」(国交もあった)
  - 薩摩藩の支配下にあった「琉球王朝」を通じた「清」、「東南アジア」(ベトナム、カンボジャ、など)との仲介貿易
  - 松前藩の勢力下にあった「アイヌ」、
- ・それ以外の外国との接点は「海難」による「漂着者」等がありました

江戸時代には想像もできない「2,500万人」とも云われる外国人が全国いたるところを闊歩するのが現在です

### ⑬「文化」

- ・民衆(町人)が発展させたとも云えます
- ・歌舞伎、浄瑠璃などの芝居見物、  
相撲見物、  
錦絵、  
大衆小説
  - 十返舎一九「東海道中膝栗毛」、
  - 滝沢馬琴「南総里見八犬伝」、
  - 式亭三馬「浮世床」、
  - 井原西鶴「好色一代男」

なども盛んになり、元禄の頃には「大衆芸能」(踊り、三味線、生け花、茶道、義太夫、小唄・長唄、川柳や狂言)が浸透していきました

- ・この中に現代に繋がるものが沢山あることは、お判りのとおりです

### ⑭「身分制度」

全く違った制度でした

### ⑮「経済・社会」

規模、構造、形態の何れを見ても全く違うことは、お話するまでもないことです

#### 4. 今 求められるものは

(1) 古典、歴史に学ぶ

(2) アナログ VS デジタル

(3) 違いが判る — 出逢いと思い遣り

(4) リーダーシップ — エリート教育

(5) 日本人の誇り — 誤った戦争観からの脱却

#### 5. 皆様へ

「志」

「学び」

「愛」

「感謝」